

主 題：キリスト者と献身的な祈り②**聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章2－4節****テーマ：献身的に祈る者として成長し続けていくために**

先週から私たちは「キリスト者と献身的な祈り」について、コロサイ4章、特に2-4節を中心に学び始めました。きょうもその続きを考えます。まずは神様のことばをお読みしますので、前回の内容を思い返しながら、それぞれみことばに耳を傾けてみてください。

コロサイ4：2－4

「2 目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。:3 同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。:4 また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。」

さて、きょうの内容に入る前に、少し前回学んだことを思い返してみてください。私たちは今改めて「祈り」について考えていました。特に先週見た2節の部分では、私たちが見做すべき祈りの姿勢について、パウロは大きく三つのことを教えてくれたのです。

○キリスト者のささげる祈り：祈りの姿勢と内容**1. 祈りの姿勢 2節**

一つ目に見た姿勢は、「たゆみなく祈ること」でした。パウロはまず、兄弟姉妹があきらめたりやめたりしないで、懸命にいつも忠実に祈り続けていくことを求めています。だれかと一緒に実際にことばに出して行う祈りであろうと、ただひとり心の中で行う祈りであろうと、どんなときもどんな場所にあったとしても、私たちがいつも神様の存在を心に留めて揺るがされることなく祈り続けていくということ、それが信仰者にとって欠かせない一つ目の祈りの姿勢でした。

次に二つ目に見た姿勢は、「目をさまして祈ること」でした。2節の一番初めに「目をさまして」と書いています。ここで「目をさます」というのは、ただ実際に眠らないように目をさましていうことではなく、「目をさまして警戒を怠らないこと」、「緊急事態に備えていること」を意味していました。特に、いつの日か必ずキリストの再臨があるということ、また救われた者は今まさに霊的な戦いの真っ只中にあって、危険な敵や、自分の肉の弱さとの葛藤が存在していることを忘れないで、いつも注意を払っていることが求められていたのです。どんなときも注意を払って、ふさわしい備えをして祈り続けていくこと、それが信仰者に欠かせない二つ目の祈りの姿勢でした。

そして三つ目に見た姿勢は、「感謝しながら祈ること」でした。確かに、私たちにはそう感じられないときもあります。でも、どんなときも変わらずに働いておられる主権者なる神様に信頼して、感謝をしながら祈り続けていくこと、それこそが信仰者にとって欠かせない三つ目の祈りの姿勢だったのです。

2. 祈りの内容 3-4節

さて、こうして三つの祈りの姿勢について触れていたパウロですが、続く3-4節では、「祈りの内容」について教えてくれました。私たちがどのような姿勢で祈るべきなのかだけではなく、いったいどんなことを祈るべきなのかについても、みことばははっきりと明らかにしていました。では、パウロの語った祈りの内容とはいったいどんなものだったのかを考えてみましょう。3-4節に大きく三つのことを見て取ることができますが、その一つ目の内容が3節の冒頭に記されていました。

1) 神様の助けを求める祈り 3a節**▶「同時に、私たちのためにも…」(新改訳2017版「同時に、私たちのために祈ってください」)**

一つ目の内容は、「神様の助けを求める祈り」です。3節はこのように始まっていました。「同時に、私たちのためにも」と。おそらくこれでも皆さんなら言わんとしていることはわかると思います。ただ2節のときと同じように、この3節も原文を見ると、語順が少し違っていました。実はこの箇所の一番始めにも「祈ってください」ということばが使われているのです。だからこそ2017年版の聖書では、3節の始めを、単に「同時に、私たちのためにも」で切らずに、「同時に、私たちのために祈ってください。」と、

はっきりと訳していました。2節で「たゆみなく祈りなさい」とコロサイの兄弟姉妹たちに命じたパウロは、それと同じように、彼らが自分たちのためにも祈ってくれるようにとお願いしていたのです。しかもそのことを強調する意味で、パウロはここに「同時に」ということばも付け加えていました。「同時に」とはどういう意味です？多分わかりますよね。このことばは言わなくても想像できるかもしれませんが、文字どおり「二つの行為、二つの行動が同時進行で行われていること」を表すものでした。つまりパウロは、信仰者たちが自分たちのために、いつも目をさまして、感謝しながら、たゆみなく祈っているのと同様進行で、パウロたちのためにも同じかたちで祈ってくれることを求めていたのです。「兄弟姉妹の皆さん、あなたがたが今置かれているその状況の中で、目をさまして祈り続けているその間、私たちのことも覚えていてください。私たちのためにも忘れずに祈っててください。」と。

さて少し考えてみてください。パウロはここで「私たちのためにも」と口にしていました。「私たちのためにも」と口にしたパウロがこの時一緒に働きをしていたのは、テモテやほかの同労者たち。特にこれから後で見えていく4：7以降には、テキコやオネシモ、エパfras…といった人たちの名前が挙がっています。パウロがその人たちのことを心に覚えていたというのは言うまでもないでしょう。パウロは確かにほかの人の必要を覚えて、ほかの人のためにも気にかけて、愛やあわれみを示そうとするそんな人物だったのです。ですから、「私たちのために」と言ったときに、パウロはほかの人たちのことを考えていたのは言うまでもありません。でも同時に彼はここで、「自分自身のためにも祈ってください」と兄弟姉妹にお願いしていました。

それが、何？と思うなら、改めて考えてみてください。このパウロとは、いったいどんな人物でした？この人物は、主イエス様ご自身からその働きを直接任された、異邦人のための使徒でした。この人物は、だれよりも知恵と知識に富んでいて、新約聖書のほとんどの書を記しただけでなく、いろんな教会を教え、励ましたり導いたりしたすばらしい教師でもありました。またこの人物は、神様によって第三の天にまで引き上げられるという経験をしたり（Ⅱコリント12：2-4）、加えて自分自身も数々の力あるわざを行うことのできた者でもあったのです。そんなパウロがコロサイの信仰者たちに対して、「私のために祈ってください」とお願いしていたのです。覚えていますか？パウロはコロサイの人々に直接会ったことはありませんでした。何度も直接会って話をしたような親しい仲にあっただけではなかったのです。ましてや彼らはまだまだ信仰も幼くて、この手紙を見ても明らかなように、さまざまな間違った教えに惑わされることもあったり、キリストの十分性というものを再び教えられる必要があるような、そんな人たちでした。普通に考えれば、そのような者たちに対してあのパウロが、「祈ってください」と口にするのは何か不思議な感じだなと。逆ならよく分かります。彼らのことをパウロが、「いつも覚えて祈っていました」と言うなら、私たちは、そのとおりに、とすぐ臍に墮ちるはずですが、でもここでパウロは、そうではありませんでした。パウロは兄弟姉妹のために変わらず祈っていただけでなく、彼らにも、私のことを祈っててくださいと求めていたのです。そしてここに、私たちは大切な姿を見ることができます。

それは、パウロはどんな働きも自分自身の力に頼ってできるとは考えていなかった、ということです。パウロは自分の弱さをわかっていました。パウロは自分の足りなさをわかっていました。パウロは自分の不十分さをわかっていました。間違いなくこのパウロは、みことばの教えには精通していたのです。でもそれでもなお、たくさんの知識を持っている自分なら自分の知恵でもって神様に喜ばれることができる、とは全く考えていませんでした。使徒として、教師として、その働きにおいて、自分の力で何かができるなどとはいっさい思っていませんでした。だからこそ、彼はそのことを別の箇所でも何度も何度も口にしていたのです。例えばⅠコリント15：10にこう記されています。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」またⅡコリント3：5-6にもこうあります。「：5 何かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。：6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。…」こうしてパウロは、自分はどんな時も神様の助けが欠かせないそんな弱い存在であるということ、不十分な存在であるということを、へりくだって認めていました。そしてそれゆえに、自分自身が絶えず祈っていただけではありません。ほかの兄弟姉妹たちに対しても、弱い私のために祈ってください、と願っていたのです。

これこそ皆さん、自分自身に必要な力や、助けや、知恵が、いったいどこからやって来るのかを正しく知っている者の生き方でした。

そうだとすれば、私たち自身の歩みを振り返ったときに、果たして私たちの祈りの生活のうちにパウロのような姿は見られるでしょうか？自分自身の弱さや足りなさをまず心から認めて、その力を与えてくださる神様を、祈りを通していつも求めようとしているのでしょうか？神様に喜ばれることをなしていくために必要になる力が自分自身のうちにはないということを、へりくだって認めているのでしょうか？そして自分自身が祈り続けているだけではありません。ほかの兄弟姉妹のところに行って、私のためにも祈ってくださいと、その支えを求めているのでしょうか？もちろん、私たちは、だれに、何を祈禱課題として伝えるのかは、知恵をもって常に注意しなければなりません。でも同時に、私たちは時に自分の葛藤や難しさをほかの人に話すこと自体をいっさいしたくない、と考えることがあります。この部分は別です、この場面においては自分だけの力でどうにかなると、実際に口にはしていなかったとしても、そうふるまっているときがあります。また私たちは周りの目を気にして、自分の弱さを見られたくない、自分の愚かな部分を知られたくないという理由で、「祈ってください」と言うのを拒むこともあります。自分の抱えている問題はだれにもバレたくないという思いに心が奪われて、助けを求めるのではなく、高慢になって人から距離を取ろうとするところもあるのです。忘れてはいけないことは、すべてにおいて私たちには神様の助けが必要だということです。そしてそれを求めるのに、私たちは自分自身がいつも神様に祈ることができる、だけではありません。私たちはいつも神様のところに行って、その助けを求めることができる、だけではありません。ほかの兄弟姉妹のところに行って、それを覚えて祈ってもらうこともできる、ということです。パウロはまさにそのように歩んでいました。自分の弱さをへりくだって認めて、自分自身が足りない者であること、自分自身の不十分さを素直に口にしたら彼は、ただ神様の力を求め続けていました。自分自身がたゆみない祈りをささげていただけではありません。同時に、同じ主を愛している兄弟姉妹たちとところに行って、私たちのためにも、私のためにも祈ってくださいと、へりくだってお願いしていたのです。

どうです？皆さん。あのパウロがいつも神様の助けを必要として祈りに励んでいたのだとしたら、今の私たちにそれが必要であることは、もう言うまでもないでしょう。私たちも自分自身の弱さを認めて、へりくだって、神様の助けを求め祈りをなすことが必要でした。それが一つ目の祈りの内容でした。

2) 福音の機会を求める祈り 3b節

次に二つ目の内容は、「福音の機会を求める祈り」です。3節を見ると、続きにこう記されていました。「神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。」

▶「門」

ここでまず、「門」という表現が使われていました。「門」…これは文字どおり「何かの扉」や「戸口」も表します。でも同時に、これは聖書の中で「福音を語る機会」であったり「キリストのために働く機会」を表すのに用いられたりするものでした。例えば同じことばが使徒の中でこのように登場しています。使徒14：27「そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったこととを報告した。」またパウロ自身も別の箇所でこのように口にしていました。Iコリント16：8-9「:8 しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。:9 というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。」ですからここで言われている「門」というのは、「福音のための機会」であったり、「キリストのために働く機会」を表していたのですが、皆さん、大切なことに気づきます？そんな「門」を、パウロは3節で何と言っています？彼は「私がみことばのために門を開いて」と言っていますか？いいえ、そんなふうには言っていませんでした。何て書いています？「神がみことばのために門を開いてくださって」とパウロは言っていました。皆さん、いったいだれが、この「門」を開くことができると書かれていました？いったいだれが、この福音を語る機会を設けることができるのでしょうか？それは、ほかのだれでもない、神様でした。福音やみことばを語るそのための機会、その扉を開くことができるのは、ただ神様だけなのだ、と、パウロはここで正しく覚えていたのです。言い換えれば、この「扉」というのは、人の知恵や人の努力によって開けることができるものではない、ということです。たとえ人がいろんな策略や工夫を凝らしたとしても、人の力によってこの「門」

を開くことは不可能だということです。だから、です。だから、パウロは祈りを必要としていました。福音を語るという、自分には到底できない働きを果たすために、それを唯一可能にすることのできるお方の働きに拠り頼み続けようとしていたのです。でもそれと同時に、パウロは、わかりました。神様が開けてくださるのなら、私には何の責任や務めもないのですね。…と考えていたのでもありませんでした。神様の働きがなければ何も始まらないと知っていた彼が、じゃあその機会がやって来る時までは何もしません、ただじーっと待っていきましょう。…とそんな態度を取っていたわけではなかったのです。だから彼は続きでこうも口にしていました。「私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。」と。

▶「キリストの奥義」

ここで「キリストの奥義」という表現が使われていました。皆さんこの「奥義」というものが何を表すものだったか覚えていますか？簡潔に言えばこの「奥義」ということばは、旧約の時代にはまだ隠されていたもので、新約の時代になってははっきりと明らかにされた「神様のご計画」や「福音の真理」のことを表していました。パウロはこのコロサイの手紙の中でも、もうすでに触れていましたが、1:26-27に「奥義」に関してパウロはこのように言っていました。「:26 これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。:27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」すでに一緒に見たことなので今は詳しくは見ませんが、この26-27節において、パウロは「奥義」に関して具体的に二つのことを挙げていました。

その一つは「キリストにあって異邦人も一つにされる」ということでした。かつてはそうではありませんでした。旧約の時代を振り返ってみれば、ユダヤ人と異邦人との間には、大きな壁というものがあるものがいつも存在していました。特にユダヤ人たちは、自分たちこそが神様の救いや祝福にあずかるのだと信じていたからこそ、それ以外の異邦人たちを忌みきらっていました。当然、当時の人たちからすれば、キリストにあってユダヤ人と異邦人が一つにされるなどということは、到底想像もできないような話だったので。でもそれが今は福音によって、キリスト・イエスにあって、ユダヤ人も異邦人もなくなったというわけです。どんな国籍であろうがどんな民族であろうがどんな文化やどんな背景を持つ人であろうとも、同じ信仰によって救われて、同じ一つのものとしてされたのです。ガラテヤ3:28でもこのように言っていました。「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」と。これが「奥義」でした。かつてはわからなかったことが、今明らかにされたのです。でもそれだけではありません。

もう一つは「キリストが信仰者のうちで生きておられる」ということでした。これも同じです。旧約の時代を振り返ってみれば、確かに当時から、救い主がやって来られるということは、何度も何度も預言されていました。そのことをよく知っていたユダヤ人たちは、だれよりもその救世主の誕生を心待ちにしていたのです。でもそんな彼らも、あることを知りませんでした。それは、やって来られるその救い主がただ来られるだけではなくて、すべての信仰者のうちに住んで働いてくださるということでした。キリストを信じて救われた者のうちに、知恵と知識に富んだキリストがいつもともにいてくださって、守り導き、必要な力や助けを与えてくださるのだということ、その真理こそ、以前は隠されていて、今は明らかにされた栄光にあふれた奥義だったのです。キリストが成し遂げられたことは、すばらしいことでした。そしてそんな「キリストの奥義」をパウロは語りたいと心から願っていました。パウロは、神様が機会を与えてくださるお方だということを知っていました。でも神様が機会を与えてくださるのなら、その時、偉大なその福音の知らせを、だれに対してであろうとも大胆に宣べ伝えたいとそう望んで、祈っていたのです。しかもその願い、その思いは、置かれた場所によって左右されてしまうようなものではありませんでした。キリストを語りたいたという彼の熱意は、自分自身を取り巻いている環境や状況によって消え去ってしまうものではありませんでした。見てください。コロサイ4:3の最後にはこう書いていました。「この奥義のために、私は牢に入れられています。」

▶「私は牢に入れられています」

ちょっと立ち止まって一緒に考えてみてください。パウロの置かれていた状況は、だれがどう見ても好ましいものではありませんでした。この時の彼はローマによって捕えられていたのです。何か大きな罪を犯したから捕えられていたのでも、だれかを殺害したからその罰を受けていたのでもありません。

パウロはキリストの十字架を忠実に語り続けていたただそれゆえに、理不尽に捕えられて、鎖に繋がれていたのです。また特に改めて時系列を考えてみると、パウロはこの時自分自身の裁判を待っている間、ローマの自宅で24時間逃げないようにと見張っている番兵と鎖で繋がれて、軟禁状態にありました。一定の自由はあれども、思いのままに行動することさえできなかったのです。それがパウロの味わっていた状況、置かれていた厳しい環境でした。

もし私たちが彼と同じ状況に置かれたとしたら、どんな態度をとりますか？私たちが兄弟姉妹に向かって、例えば何か一つ祈ってくださいとお願いするとしたら、何を祈ってくださいと言いますか？もしかしたら自分の置かれた状況に、ただ悲しみや失意を覚えているかもしれません。もしかしたら私たちは真っ先に、この状況から助け出されることをどうか覚えて祈ってください、とお願いするかもしれません。でも、パウロはそうではなかったのです。当然、彼は理不尽に捕えられているその現状を神様に正直に訴えることだってできたでしょう。鎖に捕えられている状態から早く抜け出すことができるようにと願うことさえできたでしょう。兄弟姉妹に、自分自身の将来を決める重要な裁判が迫っていることを、どうか覚えて祈っててくださいということだってできましたし、今の厳しい状況の中であって神様の慰めがあるように覚えて祈っててくださいと口にするということだってできたでしょう。でもここでパウロは、それを口にしていませんでした。その厳しい状況の中に置かれた彼が真っ先に願ったこと、それは、キリストの福音を語る機会が与えられるように覚えて祈っててください、ということだったのです。これはすごいと思いませんか？でもこれが彼の心にあった優先順位を表していたのです。彼にとって福音を語るということ、キリストのことばを宣べ伝えるということは、ほかのどんなものよりも大切な願いだったのです。そしてどんなものよりも大切な願いであったからこそ、その願いは、周りの状況に左右されることはありませんでした。どんな場面にあったとしても、神様が働いてくださってみことばのために門を開くことができるのだと確信していた彼は、その置かれた状況の中で忠実であろうとしたのです。

ですからポイントは何かと思いますか？これはすごいことだと思いますが、パウロは置かれた状況からまず出ることよりも、その状況の中でどのようにキリストをあかしするのか、そこに、彼は心を留めていたということです。そして実際に、同じように獄中で書いたピリピ人への手紙の中でも、パウロは鎖に繋がれているその状態を喜んでいました。その状態を感謝することができました。いったいどうしてでした？それは、自分と鎖で結ばれている番兵に、いつも福音を語ることができ、そして、その中の数多くの者たちが、救いへと導かれていく様子を見たからでした。ピリピ1:12-13にこう書いています。

「12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、」こうしてパウロは、牢に入れられていることを、キリストを語るができないという理由にはしませんでした。いや、さらに言うなら、自分が鎖に繋がれるまさに原因となったその福音だったとしても、自分に苦しみをもたらすことになったその福音だったとしても、それを語るのをやめるのではなく、どんな場面であろうと神様に機会を祈り求め、そしてそれを大胆に語ろうとしていたのです。それがパウロの持っていたキリストに対する熱意でした。

すると、私たち自身はどうでしょう。私たちの心は何を一番に優先しているのでしょうか？私たちはどんなことを祈りとして日々祈っているのでしょうか？もちろんこれは、私たちが日常の必要を祈れないわけではありません。もちろんこれは、苦しみや困難からの助けを神様に求めることができないのではありません。私たちはそのことも素直に神様に打ち明けることができるのです。神様の働きを期待して神様にゆだねながら歩いていくこともできるのです。でも、私たち自身を考えたときに、私たちの祈りは、置かれた状況から出ることだけに捕らわれていないのでしょうか？それとも、神様がその状況さえも用いて、福音のために扉を開いてくださること、周りの人にキリストのすばらしさを伝える機会となることを、私たちは祈っているのでしょうか？私たちの祈りは、時に、自分にとって厳しい状況であればあるほど、自分のことだけに焦点が向きやすくなったり、この世のことにのみ心が捕らわれてしまいがちになります。だから私たちは、目をさましている必要があるのです。

パウロは苦しい状況にありました。でも、神様の前に喜ばれる、永遠に価値あるものに目を留め続けていたのです。私たちも同じです。私たちも永遠に価値あるものに目を留め続けることです。いつも神様の働きを期待しながら、すべての人が最も必要としているキリストの福音を語る機会を神様に祈り求めな

がら、もしその機会が与えられるのであれば、語っていくのです。その働きのために、私たちは自分たちが祈ることができるだけではありません。私たちはお互いのことを覚えて、そして神様の助けを祈り続けていくことができるということです。それが二つ目の祈りの内容「福音の機会を求める祈り」でした。

3) 福音の鮮明さを求める祈り 4 節

そして最後三つ目の祈りの内容は、「福音の鮮明さを求める祈り」です。4 節にこのように記されています。「また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。」福音を語る機会を神様が備えてくださるようにと祈っていたパウロは、ここで、その機会が与えられた際には、わかりやすく福音を伝えることができるようにと祈っててください、とお願いしていました。ここでこの「はっきり語れるように」と訳されていることばには、もともと「何かを見えるようにする」とか「明白に認識させる」といった意味が含まれています。つまりパウロの願いは、キリストの福音を耳にするすべての人たちが、その内容を容易に認識することができるように、鮮明で、わかりやすく、大胆に宣べ伝えることにありました。彼は似たようなことをエペソ 6 : 20 でもこう口にしています。「私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」パウロはここで、自分自身が福音のための大使の役を担っていると正しく理解していました。ご存じの方もおられると思いますが、この「大使」というのは、非常に大切な責任を負っている存在でした。今の社会にも「大使」と呼ばれる人たちがいますが、この時代も彼らは皇帝や王様、そういった者に仕える身として、その国を代表して別の国に遣わされて、そこで王様の声を代わりに伝えるという務めを果たしていたのです。もちろんそんな大使に求められていたのは、自分を遣わした王様のメッセージを忠実に伝えることでした。容易に想像できると思いますが、もし大使として遣わされたその者が、遣わした王様の意図を正確に伝えなかったとしたら、どうなりますか？その話し合いは混乱が生じてしまうでしょう。ましてや王様のことばを無視したり、大使が勝手なことばを発して自分の要求を伝えることになってしまえば、最悪の場合、国家間に大きな問題が生じるようになるでしょう。大使には、いつも自分を遣わした者のことばを忠実に、正確に、そしてわかりやすく伝える必要がありました。そしてそれは、キリストの大使として福音のために仕えている者も、キリストの使節として遣わされている者も、同じだということです。だからパウロは兄弟姉妹に対して、自分のために祈ってくださいとお願いしていたのです。パウロは自分自身の弱さを認めていました。パウロは自分自身の足りなさを認めていました。パウロは自分自身に与えられている務めの大きさもわかっていました。正しく覚えていたわけです。だから彼は、自分自身がいつも鮮明に語ることで、キリストのあかしをはっきりと立てることができるようにと祈ってください、とそう強く願っていたのです。

皆さん、あのパウロが、わかりやすく語るができるように、はっきりと語るができるようにと、ほかの兄弟姉妹にその祈りを願っていたとするなら、私たちはどれほどこのことを祈らなくてはならないのでしょうか。なぜなら、パウロだけではありません。救われている者はみな、今同じようにキリストとその福音を宣べ伝えるという大切な務めを担っています。その責任を私たちもみな与えられています。マタイ 28 : 19-20 に大命令として、イエス様ご自身もこう言われていたのです。「:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るよう、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と。イエス様だけではありません。例えばペテロも I ペテロ 3 : 15 でこう言うのです。「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求め人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」ペテロも同じでした。もしだれかがやって来て、あなたがたのうちにある希望についての説明を求めたら、いつでも、だれにでも、弁明できる用意をしてなさいと。

そうだとすれば、果たしてこの責任を担っている私たちは、だれにでもキリストをはっきりと語るができるようにと、日々祈っているのでしょうか？きょう見てきたように、私たちは福音を語る機会を神様が備えてくださることも、その扉を神様が開いてくださることも祈り続けていく必要があります。でもそれと同時に、もしその機会が与えられるのなら、その時いつでも語るができるように、ただ語るだけではなく、いつでも鮮明に語るができるように備えているのでしょうか？その相手は自分の愛する家族かもしれません。友人かもしれませんし、同僚かもしれませんし、近所の人かもしれません。お

となの人に対して語るのかもしれないし、子どもたちに語ることになるのかもしれませんが。また自分では思ってもいないような人に対して、思ってもいないような場所で、思ってもいなかったようなタイミングで、私たちは福音を語る機会を神様によって与えられるのかもしれませんが。そしてそのような機会が突然やってきた時に、信じるすべての人にとって救いを得させる神の力であるその福音をわかりやすく示すことができるようにと、今祈りながら、その準備を忠実になしているでしょうか？皆さん、それが私たちには必要だということです。忘れていけません。私たちが、この働きを可能にするのではありません。福音の扉を開いてくださるのは、だれでした？ほかのだれでもない、神様でした。私たちが語るそのことばも、だれのことばでした？私たちではなく、神様のことばでした。だからこそ、私たちにとって必要なのは、祈ることだということです。だからこそ、私たちにとって必要なのは、神様の助けが自分には欠かせない弱い存在であるといつもへりくだって認めていることです。そしてどんな時であろうとも、私たちは自分自身のことの祈りをささげるだけではなく、同じように歩もうとしているほかの兄弟姉妹のことも覚えて、互いに絶えず祈り合いながら歩いていくことができるというわけです。だからすばらしいと思いませんか？

もちろん、絶えず祈り続けるということに難しさを覚えることは多々あります。特にだれかの救いのために祈っているときや、だれかに伝道しようとするとき、いつまでも結果や変化が見られなければ、あきらめてしまいそうになることがあります。でもそんなときこそ、きょう私たちが見てきたこのみことばの真理を覚え続けることです。神様が、その扉を開くことができます。神様が、その人の心のうちに働くことができます。私たちは機会が与えられた時に、それをしっかりと語る準備をしていくのです。神様に信頼してそれをなし続けることができるのです。絶えず祈り続けることができるのです。そして、実際にそのように歩んでいる人たちはたくさんいました。かつて19世紀のイギリスで活躍した宣教師のひとりジョージ・ミラーという人物も、そのような歩みをしていました。まさに”祈りの歩み”をしていました。彼に関することばがこのように言われています。「1844年11月、私は5人の回心のために祈り始めた。私は一日も休むことなく、病気であろうと健康であろうと、陸地であろうと海の上であろうと、仕事の重圧がどんなにあろうと、毎日祈った。最初の5人のうち1人が回心するまでに18ヶ月が経過した。私は神に感謝し、他の人々のために祈り続けた。5年が経ち、2人目が回心した。私は2人目のために神に感謝し、他の3人のために祈り続けた。毎日毎日、私は彼らのために祈り続け、3人目が回心するまでに6年が経過した。私は3人目のために神に感謝し、残り2人のために祈り続けた。この2人は回心しないままだった。それから36年後、ミューラーは、彼の友人の息子であった残りの2人が、未だに回心していないことについてこう書き残した。「私は神に望みを抱き、祈り続け、答えを待っている。まだ彼らは回心していないが、やがて回心するだろう。」1897年、この2人のために毎日欠かせずに祈り始めてから52年後、ついに彼らは回心した——彼が亡くなった後のことだった。ミューラーは、祈りについてのたとえ話をルカが取りあげたとき、それが何を意味するのかを理解していたのだ。こうイエスは言われていた。「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」(ルカ18:1) (ジョージ・ミューラー) すばらしい模範だと思いませんか？ミューラーは確かにたゆみなく祈る、祈りの人でした。どんな時もあきらめることなく、福音の門を開くことのできるその神様の働きに期待しながら、感謝をもって、祈りに励み続けていました。そしてそのような祈りに神様も応えられ、ご自身が人々を救いへと導かれていったのです。

感謝なのは、弱い私たちも、不十分な私たちも今同じ神様を見上げることができるということです。変わらない誠実なその神様の働きに身をゆだねながら私たちは祈ることが、そして祈りながら私たちはキリストを語り続けることができる、というわけです。そうだとすれば、神様の助けをへりくだって求めて、福音を語る機会を、自分だけではありません。互いに祈りつつ、偉大なキリストとその福音を忠実とともに語り続けていきましょう。